

美智子皇后の短歌——「平和祈念」「慰霊」の短歌を中心に

内野 光子

はじめに

平成期における美智子皇后（一九三〇）の短歌に着目し、皇后の短歌は、どのような形で発信され、どのように読まれ、鑑賞されていたのかを確認し、あわせて、「リベラル」と称される歌人や論者たちはどのように読み、評価していたのかにも触れたい。

まず、平成期の皇室全般について、昭和期・令和期と比較してみると、とくに天皇夫妻の露出の拡大が顕著であったこと、それに伴い、夫妻の短歌のメディアへの登場頻度も非常に高くなったことがわかる。平成期の天皇夫妻の活動として特徴的なのは、平和祈念、戦没者慰霊および災害地の訪問・被災者の見舞いに格別の熱意を持って積極的になされたことである。とくに、その「平和への祈り」を捧げる姿と「国民に寄り添う」振る舞いの数々が映像として拡散され、それが遺族や被災者たちへの慰藉となり、同時に、政府の防衛政策への批判や災害・福祉対策への不満解消の一つの受け皿になり、国策の補完機能を果たしてきたと言えよう。この機能を「天皇にアクトリシングする」と指摘するコメントもあった（西村祐一「象徴天皇のあり方」朝日新聞二〇一六・八・九）。結果的に、天皇の生前退位表明が「讓位を是とする国民の圧倒的支持をさらってしまった現天皇の象徴としての『力』」（加藤陽子）は

じめに「天皇はいかに受け継がれたか」續文芸出版、二〇一九・六）となったことと無関係ではない。さらに、昭和天皇の「戦争責任」という負の部分を抱う役割もあった。

令和期に入ると、COVID-19の流行期と重なり、天皇夫妻はじめ皇族の活動は狭められ、メディアへの露出自体も減少した。一方、代替わり関連の報道とともに、秋篠宮家の長女の結婚、長男の進学、新居建設などをめぐって週刊誌、テレビ、インターネット上では離間めいた情報があふれる事態も生じた。そうした状況の中で、政府及び立法府は天皇家とともに、平成から令和の代替わりを機に、「天皇制」持続のための「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」という弥縫策に走った。マス・メディアは、その「天皇制」の根本問題から目をそらし、従来通りの皇室称揚の基本的な姿勢を変えなかった（改元で騒ぎ「天皇制」論じないメディアの、思考停止「毎日新聞」二〇一九・五・二〇）。二〇三年度には、宮内庁に広報室が新設された。そのことにより、皇室報道の規制がさらに強化されないか、政府・宮内庁による情報操作につながるのではないかの疑念が表面化した¹⁾。

重ねて、COVID-19が二類感染症から五類へ移行する二〇二三年五月八日に前後して、天皇夫妻はイギリスのエリザベス女王国葬に、秋篠宮夫妻はチャールズ国王戴冠式に参列、二〇二三年六月天皇夫妻のインドネシア訪問、九月秋篠宮夫妻のベトナム訪問、一月秋篠宮次女のベルギー訪問と続き、国内への行事参加も活発となり、一気に皇室報道が増加した。

筆者は、平成期の天皇夫妻が平和・福祉・環境・災害などに寄せた短歌を中心に検証したことがある²⁾。本稿では、とくに美智子皇后の「平和祈念」「慰霊」にかかわる短歌がどのように発信、鑑賞されたかに焦点をあて、そこから波及するものをも注視したい。

① 天皇・皇后の短歌と国民との接点

天皇・皇后の短歌と国民との接点として、一般に、つぎのような場面が考えられる。

① 元日の新聞——前年の短歌から、天皇五首、皇后三首が天皇家の写真とともに公表される。類似の記事は昭和期にもあったが、令和期には、この種の記事は見当たらない。

② 歌会始——毎年、一月中旬に開催される歌会始では、天皇・皇后の短歌が、皇族、選者、召人、入選者①人の歌とともに披露され、その模様はNHKでテレビ中継される。応募歌数は、「ミツチアム」を経て、一九六八年には約四万五千首に及ぶビークを迎えたが、現在は、一万五千首前後で推移している。歌会始直後の新聞報道のほか、後日、宮内庁のホームページには、皇族の短歌と解説、選者、召人、入選者、佳作入選者の氏名と短歌などが公表される。

③ 歌会始の詠進（応募）の入門書・鑑賞書——応募の手引類の出版は盛んで、宮内庁が公表した過去の歌会始の皇族はじめ入選者らの氏名と短歌なども収録される¹⁾。

④ 歌集の出版——昭和期に、明仁皇太子・美智子皇太子妃合同歌集『ともしび』（婦人画報社、一九八六・二）、「皇太子殿下美智子妃陛下の御歌」（アサヒクラフ・昭和短歌の世界臨時増刊号、一九八六・二）、平成期に、美智子皇后の単独歌集『瀬宮』（天東出版社、一九九七・四）がある。

⑤ 記念出版・特集など——明仁天皇在位の一〇年ごとに記録集『道』が宮内庁編集でNHK出版から刊行された。美智子皇后の短歌の一部が「陛下のお側にあって」の章に「御歌（みうた）」として暦年順に収録されている。在位記念・退位・代替わりの節目には、テレビ・新聞・雑誌などマス・メディアが組む夥しい特集番組や記事・写真

⑥ 歌碑——訪問先やゆかりのある場所に建立され、関係者に見守られ、人々の目に触れることになる。平成期の天皇・皇后の歌碑について、断片的な報道はあるが、全容は不明である。美智子皇后の歌碑について、わかつた範囲でまとめておきたい。以下、短歌の小題・詞書・作歌年は、歌集などから転記した。

・かの町の野にもとめ見し夕すけの月の色して咲きぬたりしが（夏近く二〇二二年）

この歌は、平成の天皇夫妻とは関係が深い軽井沢のある病院の敷地内に、二〇二三年二月に建立された美智子皇后の歌碑に刻まれた一首である。

・耕転機若きが踏み草原の土はルビナスの花をまぜゆく（宮崎県佐藤農場「草原（歌会始）一九六三年）

・花曇かすみ深まるゆふべ来てリラの花房ゆれぬる久し（花盛）一九七四年）

右二首は、美智子皇后の生家の正田邸跡地の公園「ねむの木」に設置されたプレートに記載された皇后の短歌である。草木にもなだ短歌のプレートが十基礎てられている²⁾。

・春風も治ひて走らむこの朝女川駅を始発車いでぬ（石巻線の全線開通二〇一五年）

右は、二〇一五年三月二日、宮城県の丁石巻線の全線開通（小生田・女川）の報に接し、美智子皇后が詠んだ一首である。二〇一二年三月一日の東日本大震災後、天皇夫妻は、被災者の避難所、被災地への訪問を続けている。石巻線開通から一年後には、女川を訪ねている。さらに一年後の二〇一七年三月、女川駅近くには、この短歌の歌碑が建てられ、除幕式が行われている（石巻日新聞二〇一七・三・二二。宮内庁編 道 天皇陛下御即位三十年記念記録集『NHK出版、二〇一九・三、四〇〇頁）。

・野蒜とも愛しき地名あるを知る被災地なるを深く覚えむ（名）二〇一七年）

右の二首は、二〇一九年三月、東松島市に建つ歌碑に刻まれた。宮内庁の解説では、被災地の中に「御所のお庭でよく摘んでいらした野蒜と同じこの地名を見出され、お心に留めていらした」とある（前掲『道 天皇陛下御即位三

1 天皇・皇后の短歌はどのように発信されていたのか

天皇・皇后の短歌と国民との接点は、今後も宮内庁の意向とともにマス・メディア、インターネットなどを通して、より多様化、拡大の一途をたどるであろう。

2. 皇后の短歌の出発点

美智子皇后の短歌が初めて国民の目に触れたのは、一九六〇年、皇太子と結婚の翌年、歌会始に「東宮妃」として、御題「光」を詠んだときの歌であった。

・光たらふ春を心に持ちてよりいのちふあめる土になじみ来

皇太子との婚約後の、いわゆる「お妃教育」は、一九五九年一月二日に始まった。一週間合計九七時間、憲法、宮中関係七科目、語学(英語、フランス語)、和歌など二科目であった。五島美代子担当の「和歌」は、週一回、二時間一〇回の日程だった(大江相政日記三朝日新聞社、一九〇・五・二六頁)。また、五島美代子のエッセイによれば、開講に先立って、三つの目標、本当の心もちをありのままに詠む、毎日、古今の名歌を一首暗唱する、一日一首を百日間作り続けることを約し、彼女はすべてクリアしたという(五島美代子「妃のきみ」花時詩白玉書房、一九七九・四・三二―三五頁)。なお、美智子皇后の子どもの頃の短歌が、祖母の正田きぬ(二八〇―一九七〇)が会員であった「心の花」に掲載されていたと話題になったことがある(ANNエクス二〇九・四・二七)。一九四六年七月号から数回、佐佐木信綱選「その三欄」に掲載された七首から一首を引く。恵まれた環境で、短歌は身近な存在であったことが伺える。

・露深い草の小路をおはあ様と野菜かごさげてお島へ行く(一九四六年九月)

ちなみに、雅子皇后の「お妃教育」は、語学や外交関係などの科目が減り、六週間五〇時間に短縮され、岡野弘彦担当の「和歌」は一〇時間と半減した(朝日新聞一九三・三・三三)。いずれの場合も、「和歌」の占める割合が高

く、宮中の伝統的な文化の一つとされ、さらに、国民への発信のツールとして重視していることがわかる。

2

2 皇后の短歌はどのように鑑賞され、広められていったのか

皇后は、天皇とともに国内外への訪問を重ね、戦争や災害による犠牲者への慰霊の旅を続けた。沖繩には、皇太子妃時代を含め、一回訪問し、その都度の目的とは別に、毎回「平和の礎」をはじめ戦没者の慰霊碑へ参拝するものが恒例となった。

・雨激しくそぞく摩文仁の岡の辺に傷つきしものあまりに多く(皇太子妃)(五月十五日沖繩復帰)一九七二

天皇夫妻は、各都道府県への訪問は二巡しているが、沖繩県への訪問回数は突出している。このこと自体、一つの政治的役割を持つ証とも言えるが、夫妻の沖繩への思い入れは格別で、天皇は、沖繩に古くから伝わる八・八・六を基調とする琉歌も発表している。すでに別稿「天皇の沖繩の短歌は何を語るのか」(社会文学)四四号、二〇一六・八で触れているので、ここでは詳述しないが、加えて、昭和天皇の二つの「負の遺産」と深くかかわっていると考えている。一つは、一九四五年三月から六月にかけて、昭和天皇は、本土決戦の防波堤、捨て石として、沖繩地上戦を続行させ、二〇万人の戦死者を出し、沖繩の軍人・軍属二・八万人、県民九・四万人が亡くなっていること(沖繩県における戦災の状況)総務省のホームページによる)。一つは、一九四七年九月、寺崎英成を通じてGHQに琉球諸島の長期占領(琉球諸島の占領継続を長期租借の二国間条約)を願い出たこと。後者は、「天皇メッセージ」と呼ばれる文書により明らかになった(進藤栄一「分割された領土」世界一九七九・四)。

一九四四年二月、天皇夫妻は、六月のアメリカ訪問に先立って小笠原諸島を訪問、硫黄島の戦没者の碑、鎮魂の碑に参拝、天皇は「精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき」とやや公式的に詠んだが、皇后はつぎのように詠む。

・慰霊地は今安らかに水をたたえ如何ばかり君ら水を流りけむ(疎黄島一九九四年)

疎黄島は、アジア・太平洋戦争末期、一九四五年二月一日に米軍の砲撃が始まり、三月二六日制圧され、日本軍「玉砕」の島として知られる。戦死者は、日本軍約二九〇〇人、米軍六一四〇人に達した。生き残った兵士たちや島民たちの生の証言は、筆舌に尽くしがたい惨憺を極め、NHKアライアスの「戦争証言・疎黄島の戦い」厚生労働省の「疎黄島証言映像」などで知ることができる。兵士たちは、水や食料、武器を絶たれた中で戦いであつた。大岡信は、この短歌を「立场上の儀礼的な歌ではない。豊かで沈痛な感情生活が現れている。(中略)最新作まで一貫して気品のある詠風だが、抑制された端正な歌から、情愛深く、また哀愁にうろたう歌の数々まで、往古の宮廷女流の誰彼を思わせる」と絶賛している(「折々のうた」『朝日新聞』一九九七年七月二三日)。だが、この一首は、死の間に水を求める兵士たちの壮絶な姿を兵士たちに呼びかける形で情緒で包み込み、美化してはいまいか。

・被爆五十年広島島の地に静かにも雨降り注ぐ雨の香のして(広島一九九五年)

一九九五年、広島を訪問した皇后は、「雨の香」に着目、右の一首を残した。二〇〇四年より歌会始選者を務めている水田和宏は、「雨に雨の香がする。それ自体感覚の冴えの感じられる歌であるが『被爆五十年』という初句がある一首を単に感覚の歌として鑑賞することを許さない」(「歌のうた」文藝春秋、二〇一九年六月一〇一―一〇二頁)としているが、原爆投下後に「黒い雨」に打たれた被爆者たちの心情には暗なものではなかつたか。

つぎは、天皇夫妻が、二〇〇五年、初めての海外への慰霊の旅、サイパン島を訪問した折の皇后の一首である。

・いまはとて島果ての崖踏みけりしをみなな足裏思へばかなし(サイパン島二〇〇五年)

つぎつぎと崖から飛び降りて自決した日本の女性たちの映像は、幾度か報じられてきた。水田和宏は、「崖を踏み蹴って、海へ身を投げた女性の『足裏』を思っておられるところに、繊細な感性を感じることができます。悲しく、しみじみと身に沁みる歌であります」と述べている(「阿陛下の歌に見る『銀盤』の意味」NHK視点・論点二〇一〇年三月六日)。比較文学者の芳賀徹は、「皇后陛下」の短歌の中で、一番痛切で、忘れることのできない一首とした(九・三六)。

上で、「強烈で、よくここまで思い浮かべて、それを言葉になさったと感嘆しました」と発言している(「座談会・阿陛下のお歌を鑑賞する」『短歌研究』二〇一九年二月)。しかし、彼女たちの自決の経緯や背景を思うと「かなし」として収め切れるものではないだろう。皇后の短歌において、「かなし」は、しばしば使用される心情表現だったのである。

つぎの短歌には、海外の戦争や内乱における加害、被害の認識について、やや屈折した思いが詠み込まれている。

・慰霊碑は白夜に立てり君が花抗議者の花とも置かれて(オランダ訪問二〇〇〇年)

二〇〇〇年五月三日、オランダを訪問した天皇夫妻が、アムステルダムにおいて、戦没者の遺族や戦傷者たちの抗議活動に出会うも、ダム広場の戦没者記念碑に花輪を供えた夜のことは皇后は詠んでいる。アジア・太平洋戦争下で日本軍は、インドネシアでオランダ軍捕虜四万人とオランダ系住民九万人を強制収容所に抑留、多数の犠牲者を出していたので、戦後、反日感情は高まっていた。一九七一年、昭和天皇夫妻が訪問したときも、二〇〇〇年のときも、アムステルダム、ハーグなど天皇夫妻の行く先々で、戦争被害の補償と謝罪を求める人々がいた(日本経済新聞(夕)二〇〇〇年五月二六)。宮内庁の解説によれば、天皇の供花と戦争被害者の一群が供えた白菊が「白夜の光の中に浮かんでいる様を感慨深くご覧になって詠まれた」という(宮内庁編『道 天皇陛下御即位二十年記念記録集 N』出版、二〇〇九年四月四頁)。この解説では、たんなる「戦争被害者」としか示されず、加害者としての日本と如何に認識は消し去られている。

・知らずしてわれも撃ちしや春鬧くるバミミアンの野にみ仏在さず(野二〇〇一年)

二〇〇一年二月、アフガニスタンの首都カブール近郊にある古代遺跡群の中の巨大な石仏が、タリバンにより破壊された。この報道を受けての作である。宮内庁の解説では「人間の中にひそむ憎しみや不寛容の表れとして仏像が破壊された」とすればしらす自身も一つの弾を撃っていたのではないだろうか、という悲しみと悔れの気持ちをお詠みになった御歌」と記す(前掲『道 即位二十年記念記録集』四八六頁)。画家の安野光雅は、知らずして弾を撃つ立場にいたのではないかと「かなしまれるおもいは、痛切である」と綴る(安野光雅『皇后美智子さまのうた』朝日文庫

愛読者、愛好者が多い証ともいえるのではないか。

さらに二〇一六年八月八日の天皇の生前退位の表明直後や二〇一九年四月三〇日退位前後の平成回顧報道は、昭和天皇の重病・死去報道時と同様に、まさにステレオタイプの天皇夫妻称揚報道が溢れ出し、早々に、書籍として出版された。しかし、昭和からの代替わりと若干異なる傾向を見せたのは、いわゆる「護憲派」「リベラル派」と称される中堅の歌人、研究者や評論家たち、それまで天皇制からは距離を置いていたと思われる人々の称揚発言が活発になったことである。そして、天皇への親近感が醸成され、男女平等思想とは全く相容れない天皇制維持・温存のための女系天皇・女性天皇を可とするような世論の形成の一翼を担ったのである。

たとえば、『永統敗戦論——戦後日本の核心』（天田出版 二〇一三年三月の著者、白井聡（一九七七）は、天皇の沖繩訪問に触れて、沖繩が「永統敗戦レジームによる国民統合の矛盾を押しつけられた場所だからでしょう。天皇はこうした状況全般に対する強い危機感を抱き、この危機を乗り越えようと聞くつてきた。そうした姿に共感と敬意を私は覚えます」と述べる（天皇のお言葉に秘められた〈列じき〉を読む（国分功一郎との対談）『東洋経済新報（オンライン）』二〇一八年八月二日）。『東京新聞』の社会部記者で、政府はじめ権力と闘うイメージの強い望月衣塑子（一九七五）は、作家の島田雅彦との対談の中で、コロナ禍こそ、天皇や皇后のメッセージが欲しいと期待を寄せている（皇后陛下が立ち上がる時）『返』新潮社、二〇二〇年五月）。憲法学者の木村草太（一九八〇）は、「そもそも天皇制自体、憲法の上で付けてとして少しおかし」とし、人権制限を受ける皇族が「お気の毒」と考えるなら、天皇制をやめた方がいい」としながら「天皇制と人権（河西秀哉と木村草太が語る）『法』二〇二二年一月、一七―一九頁）。天皇制の「積極的な意義」は「政治の場に品格や公共性を示すこと」であり、「消極的な意義」は「その地位を利用してないために、ある程度の人権」などが制限されることにあるとして、天皇制を容認している（掲載）『神権タイムズ』二〇一九年五月三日）。さらに、右の論者たちの上の世代の「リベラル派」と称される人々の発言にも注目したい。作家で、『週刊金曜日』の編集委員の落合恵子（一九四五）は、新天皇の大嘗祭での「おことば」を評価し、「お一人に願うことは、お

さまざまな形で、発信されてきた皇后の短歌は、宮内庁の解説や歌人、ジャーナリストらの見聞によるエピソードなどを背景に鑑賞されることが多い。その大半は、天皇を支え、祭祀に勤しみ、天皇の後継者を生み育て、象徴天皇制の維持に寄与することを前提とした枠からはみ出すことをしない。そして、これらの短歌は最大限の称揚をもって、拡散され続けている。

とくに、「平和折念」「慰霊」の短歌は、沖縄や硫黄島、海外の激戦地での遺骨収集も進まず、また、原爆・空襲被害者の補償についていまだに法廷闘争が続けられている中、犠牲者や遺族のいつときの「慰霊」や「慰籍」にはなつたかもしれない。しかし、問題の解決には結びつかないまま、戦後政治の歪みから国民の目を反らさせ、行き届かない政策を受容させる役割さえ果たしてきたのではないかと考えている。

3 天皇制維持への皇后としての意欲——「リベラル」な論者の支持を追い風として

美智子皇后の短歌による平和折念というメッセージは、明仁天皇の短歌と種々の「おことば」と相俟つて、天皇制維持への意欲の一端を国民に受け入れ易い形で示している。近年は「リベラル」と言われる論者たちの皇后の短歌への評価も高まってきたのである。

前述の歌人、永田和宏は、平成期の天皇夫妻について「国内外の慰霊の旅が、平和を希求される陛下下の強い思いから出ている」とし、「平成という時代は、近代日本の歴史のなかで、唯一戦争のなかった幸せな時代でした」と述べた（前掲「陛下下の歌に見る『象徴』の意味」『NHK視点・論点』二〇一九年三月六日）。その楽天的な歴史認識は、多くの国民の間でもかなり定着しつつあるといえよう。平成の晩期には、天皇夫妻の短歌に焦点をあてた多くの図書が出版されている。美智子皇后の短歌を対象とした安野光雅の前掲書のような図書の出版も相次いだ。皇后の短歌の

言葉で繰り返された平和を、ずっと希求される『象徴』であっていただきたい」と述べる〔西陛下へ〕沖繩タイムズ 二〇一九・一一・二二〕。また、内田樹（一九五〇）は、天皇の役割は祖霊の祭祀と国民の安寧・幸福を祈願することだとし、「明仁天皇」陛下はその伝統に即った上でさらに一歩を進め、象徴天皇の本務は死者たちの鎮魂と苦しむ者の慰藉である」と述べる（私の天皇論『月刊日本』二〇一九・一）。作家で、さまざまなか場での発言も活発な高橋源一郎（一九五二）は、憲法の天皇条項について「削除するがいちばんいいと思う。要するに、天皇制を廃止するのはどうも、それで、日本国民の多くの賛同を得難いので、天皇条項は憲法の「後ろの条文に回すか、第一章を皇室典範に拡大して收納する」のほうがいいと思うと著地する（楽しい知識 僕らの天皇（憲法・憲法・故の隣人・コロナ時代）朝日新聞社、二〇二〇・九）。憲法学者の長谷部恭男（一九五六）は、二〇一五年六月衆議院憲法審査会において、自民・公明党推薦の参考人でありながら集団的自衛権の違憲を表明して話題になったが、日本国憲法は身分制秩序の破壊を大部分は貫徹したが「最後に天皇制という身分制の飛び地を残してしまっただ」という形で現状を認識している（天皇って人権がなくてヤバくないですか？「高橋源一郎×長谷部恭男」憲法対談（文春オンライン）二〇一八・八）。加藤陽子（一九六〇）は「前（明仁）天皇は「原字力発電所の状況が予断を許さぬ」と言い切った。この人は危機のときに本当のことを言ってくれるはずという人々の信頼に応えた」（天皇代替わりを振り返る『毎日新聞』二〇一九・二・一七）と述べて、上野千鶴子（一九四八）の「加藤陽子さんは（中略）前天皇の信任が厚く何度も御進講に招かれていました」との発言は「進講」が研究者の権威でもあるかのように読めるのである（保阪正康・上野千鶴子対談「フアンシヨ」の構図を読み解く『世界』二〇一九・二二・一四三―一四四頁）。

日本共産党は、「綱領（二〇〇四年）」に定める「天皇制度」について「一人の個人が世襲で『国民統合』の象徴となるという現制度は、民主主義および人間の平等の原則と両立するものではなく、国民主権の原則の首尾一貫した展開のためには、民主共和制の政治体制の実現をはかるべきだとの立場に立つ」と明記している。しかし、議会において、二〇一五年二月、新憲法以来、天皇が「開会の言葉」を述べる国会開会式への出席を拒否してきたが、突

然出席を表明、二〇一六年八月、天皇の生前退位表明後、違憲の可能性がある前述の皇室典範特例法に賛成した。二〇一九年五月、衆議院での天皇即位慶祝の「賀詞奉呈」にも賛成したが、その文言は「令和の御代の末永き御栄をお祈り申し上げます」という大時代的なものであった。

おわりに

平成期後半から末期には、直接なひしは間接的であれ、天皇・皇后へのエールが高まった。美智子皇后の情感に訴える短歌による発信と「平和祈念」「慰霊」というパフォーマンスが繰り返され、国民の皇室への親近感を高め、ときには、カリスマ性さえも発揮してきた。

令和期に入っても、皇室においては、美智子皇后が残した発信の形は、一部ながら受け継がれるだろう。政府は、天皇制が持つとされる伝統的、文化的要素を強調し、戦略の一つとして、天皇制を維持することに腐心するのではない。かくに若年層の皇室自体への関心が薄れる中で、差別の根源とも言われる天皇制の行方を注視しなければならぬ。

注

- (1) 広報室長に警察庁外事課経済安全保障室長を務めた藤原麻衣子が就任した。雑誌、インターネットメディア関係、皇室の名譽を損なう不適切な出版物などの対応を担うとする。新設の「渉外専門官」や「広報推進専門官」を含め、十人規模でスタートした（宮内庁が『広報室』新設『毎日新聞』二〇二三・四・一）。
- (2) 拙稿「天皇の短歌、環境・福祉・災害へのまなざし」「天皇の短歌、平和への願いは届くのか」（天皇の短歌は何を語るのか）御茶の水書房、二〇一三・八。「天皇の沖繩の短歌は何を語るのか」（『社会文学』四四号 二〇一六・八）。

- (3) NHKのテレビ中継が始まったのは、一九六二年一月二日の歌会始からであった(年表)『日本放送史 別巻』日本放送協編刊、一九六五・二二(一七四頁)。
- (4) 入江相取・木俣修・坊城俊民編著『宮中新年歌会始』(実業之日本社、一九七九・九)、菊業文化協編『宮中歌会始』(毎日新聞社、一九九五・四)、宮内庁編『宮中歌会始全歌集 歌がつむぐ平成の時代』(東京書譜、二〇一九・四)などがある。
- (5) 永田和宏「象徴のうた」(文芸春秋、二〇一九・六)。短歌総合誌でも以下の特集が組まれた。「平成の大御歌と御歌特集」(短歌研究、二〇一九・一)、三枝昂之「ひまわりと薔薇」平成三十一年宮中歌会始の御製と御歌を読む」(短歌、二〇一九・四)。
- (6) 正田邸は、皇后の父正田英三郎の死後二〇一年に相続の一部として物納後、品川区が国から公園用地として取得、二〇〇四年八月「ねむの木の庭」として開園している。
- (7) 「確實島戦没者の碑」は、一九六六年三月建立、二万一九〇〇人が、「鎮魂の碑」は、一九八三年八月建立、一四五連隊の約二五〇〇人が祀られている。厚生労働省社会援護局、小笠原村HPによれば、遺骨収集は、二〇一六年現在、戦没者の半数にも至っていない。
- (8) 被爆者たちは、一九七〇年代から、「黒い雨」の被爆による援護区域の拡大、被爆者健康手帳の交付を要請していた。二〇一五年集団訴訟に踏み切り、二〇二二年七月、広島高裁での原告全員の被爆者健康手帳交付を認める判決に対し、国は上告を断念している。長崎においては、援護区域外の被爆体験者による同様の訴訟が続けられている。
- (9) 養道義枝「皇后美智子さま全御歌」(新潮社、二〇一四・一〇)、割田剛雄ほか「皇后美智子さまの御歌」(パイン・タナシヨナル、二〇一五・一)、田中真義「母のうた 美智子さまの御歌」(徳間書店、二〇一九・三)、山口謡司ほか「美智子さま 心に響くすてきな御歌100選」(宝島社、二〇一九・四)、濱田美枝子「折り 上皇后美智子さまと歌 人五島美代子」(藤原書店、二〇二一・六)などがある。
- (10) 朝日新聞社会部「折りの旅―被災地への想い」(朝日新聞出版、二〇一八・二)、毎日新聞社会部「象徴として―天皇皇后陛下はなぜかくも国民に愛されたのか」(毎日新聞出版、二〇一九・四)。写真集に、宮内庁監修「天皇陛下御即位三十年・ご成婚六十周年記念 平成を奉まれて」(共同通信社、二〇一九・三)、宮内庁侍従監修「御即位30年ご成婚60年 国民とともに歩まれた平成の30年」(毎日新聞出版、二〇一九・一)などがある。
- (11) 加藤元直「平成の皇室観」『放送研究と調査』(二〇一〇・一〇)によれば、二〇〇九年九月調査では、「ある程度親しみを感ずる」としても親しみを感ずる」をあわせて六一%。荒牧央「新時代の皇室観」『放送研究と調査』(二〇一〇・三)によれば、二〇一九年九月では、同様の質問に七一%であった。
- (12) 二〇〇九年調査では、皇室への関心の有無の質問に、二〇代で五一%、三〇代で三八%が「関心がない」と回答している。また、皇位の継承問題への国民全体の無関心を指摘する論者もいる(河西秀哉「若き皇族 苦しめる無関心」『毎日新聞』二〇一三・一〇・二七)。

渡部優実子（なべ・ゆみ）日本女子大学他非常勤講師。共著『青鷲
と世界の「新しい女たち」』（翰林書房）、『昭和前期女性文学論』（同）、

矢澤美佐紀（やざわ・みさき）法政大学他非常勤講師。著書『女性文学
の現在——貧困・労働・格差』（齊柿堂）、共著『昭和後期女性文学論』

山崎眞紀子（やまざき・まきこ）日本大学大学院総合社会情報研究科
授・日本大学スポート科学部教授。著書『村上春樹と女性』、北海道：『

（彩流社）、共著『中戦時下の中国語雑誌「女声」』（フェミニスト田村
俊子を中心に）（春風社）、論文『青島——翻訳都市 須賀敏子の青島』

（和田博文氏が編『中国の都市の歴史』勉誠出版）

山田昭子（やまだ・あきこ）専修大学他非常勤講師。著書『言葉僞子——
小説の枠を超えて』（春風社）、論文『新女苑』における中里恒子の仕

事（『芸術至上主義文芸』49号）、『文字の美しさと少女の美——少女雜
誌広告に見る文字挿詩の発展——』（ことばと文字」12号）

羅麗傑（ら・れいけい）天津外国语学院天津大学准教授。著書『戦後日本第一世
代女性詩人——夫木のり子と石垣りんの表現空間』（天津人民出版社）、

共著『昭和後期女性文学論』（翰林書房）、論文『女として個人として
——石垣りん挿詩に現れる女性性について』（比較クワイア・女性文

化研究 創刊号）

渡辺みえこ（わたなべ・みえこ）詩人。著書『女のいない死の楽園 供養
の身体・三島由紀夫（『アンドロカンプ』21号）刊 現代書館発売）、『語り

得ぬもの：村上春樹の女性（『スピア』）表裏』（朝来の木書房）、論文
『いちど希望の詩人・高良留美子』（『パンクミツク』とフェミニズム

——新・フェミニズム批評の会創立30周年記念論集』（翰林書房）

現代女性文学論

発行日	2024年12月10日 初版第一刷
編者	新・フェミニズム批評の会◎
発行所	翰林書房
	〒151-0066 渋谷区世塚1-56-10
	電話 (03) 6276-0633
	FAX (03) 6276-0634
	http://www.keirin.co.jp/
	Eメール JUK@keirin@nifty.com
送料	須藤麻子+島津デザイン事務所
印刷・製本	メテューム

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan, 2024.

ISBN978-4-8737-486-0